

カナダ中銀、慎重ながら楽観的で現状維持

資源国カナダは地理的にも経済的にも米国に近いことから、政策金利などの金融政策は、変更時期などが米国に近い場合もあります。しかし近いとはいえ、国の事情はやはり異なります。特に通貨はカナダドル高(米ドル安)傾向が足元まで続いており、声明でも遠まわしな表現ながら通貨高をけん制していますが、積極的な通貨高対策には程遠いです。

カナダ中央銀行：市場予想通り、政策は据置、景気には慎重ながら楽観的な面も

カナダ銀行(中央銀行)は2020年12月9日、市場予想通り政策金利を0.25%で据え置くと発表しました(図表1参照)。据え置きは6会合連続です。

量的金融緩和政策(週最低40億カナダドルのペース)も現状維持を表明しています。なお、景気についてカナダ中銀は慎重ながら楽観的な見通しを述べています。

どこに注目すべきか：新規感染者数、第2波、資源価格、通貨高

資源国カナダは地理的にも経済的にも米国に近いことから、政策金利などの金融政策は、変更時期などが米国に近い場合もあります。しかし近いとはいえ、国の事情はやはり異なります。特に通貨はカナダドル高(米ドル安)傾向が足元まで続いており、声明でも遠まわしな表現ながら通貨高をけん制していますが、積極的な通貨高対策には程遠いです。

まず、カナダ中銀のカナダ経済についての現状認識を振り返ります。報道などではカナダ中銀の景気認識は「慎重ながら楽観的」と表現されています。楽観的なのは声明でワクチン開発の進展による新型コロナウイルス感染の収束と経済活動の(中長期的な)正常化を指摘している点です。

慎重なのはカナダでも秋から新型コロナの感染者が増加傾向なことです(図表2参照)。カナダの11月の雇用統計では失業率が8.5%と市場予想(9.0%)を下回り改善傾向でしたが、新型コロナの景気への影響が目先懸念されます。声明では21年1-3月期の成長への下押し圧力の可能性が指摘されています。

なお、蛇足ながら、カナダ中銀は現局面の新型コロナ感染者数の増加を第2波と呼んでいます。米国と比べても夏の新規感染者数の増加が抑制されていたからです。また、図表2では米国の新規感染者数は、桁違いであるため右軸としています。カナダの人口は約3800万人と3億人を上回る米国を下回りますが、この差を考えても米国はより深刻です。もっとも、カナダ当局も現在の新型コロナの状況を深刻に受け止め、一部経済制限を行うと共に、景気対策として

11月末に1000億カナダドル規模(GDP(国内総生産)の3~4%に相当)の財政政策を打ち出す考えを表明しています。

金融政策は今回の声明で現在の低金利を、2023年まで継続する考えを明記しています。また、量的金融緩和については前回の会合で購入額を50億カナダドルから40億カナダドルへ縮小していますが、長期セクターの債券を購入対象に拡大して金利上昇を抑制する考えを示しています。財政政策を当面サポートする姿勢と見られます。

なお、カナダドル高は、夏までの新型コロナの抑制と、最近では原油高など資源価格上昇を受け下落しにくい展開となっています。カナダ中銀のマックレム総裁は10月に講演でマイナス金利導入について積極的に議論してはならないが「絶対ないとは言いきれない」と述べています。恐らくカナダドル高が念頭にあったと思われますが、導入の機運は低いようです。カナダドルは当面、資源価格の影響を受けそうです。

図表1：カナダ政策金利とカナダ(加)ドル(対米ドル)の推移
日次、期間：2019年12月9日~2020年12月9日



図表2：カナダと米国コロナ新規感染者数と死亡者数の推移
日次、期間：2020年1月22日~2020年12月9日、変化幅の7日移動平均

